

藤盛教授が「もうすぐ出ますよ」とにんまりして筆者に話しかけたとき、「え?何が?」という返事に、「嫌だなあ、『消化管の病理学』ですよ、僕のライフワークなんだから」と不満そうな顔だったのが2、3カ月前のことである。「ああそうか、ついに出るのか」というのが筆者の感想であった。たしかに数年前から、同氏が“これまでとは根本的に違った独創的な消化管病理学の textbook を出すのだ”と息巻いていたことは知っていた。このあたりのいきさつについては序文に詳しい。序文とあとがきを読むと、同氏の本書にかけた情熱が伝わってくる。同時に、本書の完成には極めて多くの人びとがかかわってきたことに驚きを禁じ得ない。藤盛教授の単著の形式を取ってはいるものの、これだけの人々が症例を提供し、病理標本を作製し、すばらしい写真を取り、本書に大きな貢献をしてきたらしいことがわかるし、氏もこの点に謙虚に深甚の意を表している。

さて、本書の特徴を筆者なりに(病理学の素人として)挙げてみたい。

まず第一に、口腔から肛門まで消化管全般にわたって高度な内容を非常に要領よく、研修医にもわかるような記載で一貫していることである。これは、最近多い多数の分担による著作と異なるところで、近年稀にみるものと言ってよいであろう。このことは、この数カ月、ほとんど徹夜に近いような作業で、しかも好きな酒もほとんど断って1人で著述した氏の努力、根性の賜である。すべての消化管とはいっても、やはり氏の専門である大腸疾患に対する記載に迫力がある。

第二の特徴は、非常にクリアな病理写真とともに、拡大内視鏡、色素内視鏡も含めて多くの内視鏡写真がちりばめられていることである。真偽のほどはともかく、同氏が内視鏡の達人であると自負していることが、本書を内視鏡学と病理学の橋渡しというこのユニークで独創的な textbook にし得た所以であろう。事実、本書の核心は、内視鏡による生検やEMRなどによる標本を中心としたものである。これは、氏の術前の正しい診断の重要性の認識と、内視鏡診断治療への厳しきの表現ともとれるものである。

第三の特徴は、氏の得意な分子病理学についての

記載である。これには、本来氏がトップにもってきかかったものを、理解しやすさをも含めてあえて最後にもってきかしたという氏の読者、特に小生へのいたわりのようなものを感じる。これから病理学をやるという若き学徒への氏からの shy な message なのであろう。

その他にも、例えば、消化管の発生、正常組織像アトラス、生検の取り方、依頼の仕方、標本作製などに至る細やかな配慮が伺えるのも本書の特徴といえる。病理標本の取り違いなどをどのように防ぐかという観点にも言及してあるが、病理学の責任から言えば極めて重要なことで、もっと紙面を割いてもよかったかもしれない。今後の重要な課題である。文献は、巻末に565編の英文論文のみ紹介されている。この点も氏の学問に対する厳しい姿勢の表れと筆者は考えている。邦文の重要な文献は、本文のなかでのみ紹介されているというのも読者の利便性を考え、直ちに文献にあたれという氏の基本姿勢の表現であろう。

藤盛教授がわが獨協医科大学病理学教授として赴任されて、8年が過ぎたらしい。この間、本学ならびに関東では、関西から若干変わった教授が来たということで波紋を投げたこともあったようであるが、とにかくこのようなすばらしい独創的な textbook を出版されたということは、本学にとって非常な名誉である。学会、研究会における氏の発言は、極めて鋭く、それ故に誤解されることもなしとしないが、その向きはぜひ本書をお読みになると思う。きつと胸のつかえが下りるだろう。この度発足した「日本消化管学会」においても、氏は重要な役割を果たすであろうし、われわれも大いに期待しているところである。

藤盛教授は、分子病理学を得意とするように大変現代的な方であるが、他方、本書にもあるように、恩師である長廻先生を心から慕うなど古風なところもあり、まさに「温故知新」の典型的な人物である。

病理学専門医、内視鏡専門医、レジデントあるいは医学生の諸君に本書を強く薦める。

(B5判 264頁 定価12,600円(本体12,000円+税5%))
(2004年 医学書院 刊)